

北支山西省での共産軍との戦い

長崎県 森 本 義 正

私は島原市有馬船津町で魚屋を営む森本家の長男として、大正十（一九二一）年十二月十三日、生を享けました。貧乏人の子沢山の諺通り、男六人女三人の九人兄弟の長男として生れました。九人の子供を養育しての小さな魚屋の生活は、両親にとりましては大変な苦労だったと思います。

昭和十一（一九三六）年三月、島原第三尋常小学校高等科を卒業して腕に技術を習得しようとして両親の許しを得て左官の見習いに就職し、師匠に叱られながらも左官の技術を学ぶために一生懸命頑張りました。

昭和十二年七月七日、支那事変が勃発し、町内からも赤紙の召集令状により青年や壮年の方々が、家族親戚に見送られ出征して行きました。

昭和十六年四月、五年間の見習いを終え、一人

前の左官職人として認められました。当時、徴兵検査は二回あり、早生まれの私達は後方で、昭和十七年三月に徴兵検査を受けました。残念ながら第一乙種合格で、甲種合格になった人達をうらやましく思いました。

そして昭和十六年十二月八日未明、真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発し、世の中は騒然となりました。軍艦マーチの後に「大本営発表と日本軍の勝利」が毎日のようにラジオから流れ、連戦連勝のニュースに仕事も手につかない日々でした。建築の仕事であちこち回りますと、戦争の話で持ち切り、出征軍人を送る光景を多く見かけるようになりました。徴兵検査を終わった私にもいつ赤紙召集が来るか分かりません。覚悟していました。両親の苦労を考えますと、長男の私は働けるだけ働いて、少しでも家の役に立たねばと頑張りました。

昭和十七年の暮れには、日本軍も南方方面で少し心配になって来ました。昭和十八年四月、私は

佐世保市の船泊りで仕事をしていましたが、二男が大村市の第二十一航空廠に就職すると聞き、見送りのために島原に帰りました。弟を島原湊駅に送って自宅に帰りますと、島原市役所の兵事係の人が来て「おめでとうございます。召集令状です、頑張つて下さい」と赤紙の召集令状を渡されました。それには「教育召集として四月十日午前十時、福岡市の歩兵第一一三連隊に入隊せよ」との令状でした。入隊日まで間がないので佐世保市に帰り、仲間の皆さんに報告、急いで島原の家に帰り入隊の準備をしました。

戦争も激しくなってきた時だけに、自分の家から出征軍人を出すことは名誉といわれている時代、長男を兵隊に送り出すと家は困ると思いつながら、両親は涙一つ出さず「体に気を付けて頑張れよ」と島原湊駅で「万歳！万歳！」で送ってくれました。私は二度と島原に帰ることもなからうと思うと目に涙があふれてきました。

入隊時間の都合で前日の九日に出発、福岡に一

泊、十日十時前に福岡市の舞鶴城址に在った歩兵第一一三連隊に入隊しました。島原市からも同年輩の人達が七人入隊し心強く思いましたが、七人はそれぞれ違った中隊に編入され、佐藤賢一君だけが同じ第八中隊でした。そして同日付で教育召集は臨時召集となり補充兵に切り換えられました。

兵隊生活が始まり、男同志の厳しい生活でした。覚悟していた厳しい訓練でしたが、古年兵から、在隊者は福岡県、佐賀県、長崎県の人達が多いと聞き助かりました。そして十月十日、一期の検閲が終了、一等兵に進級し、昭和十八年は暮れ去りました。

昭和十九年一月二日、第二中隊に編入替えになり、さては第一線に出動かなあと思っていますと、二月十一日の紀元節の日に、独立歩兵第二二七大隊が新しく編成され、矢木野少佐以下千四百二十七人で動員が完結しました。そして行き先不明のまま出動することになり、二月十八日、三梯団に分けられ、博多駅を出発し門司港に向いました。

二月十九日、門司港を輸送船で出港、二月二十日釜山に上陸、兵站宿舎で一泊しました。翌二月二十一日、日本人小学校に集合、釜山を軍用列車で出発、朝鮮半島を縦断して二月二十三日、鮮満国境を通過、満州国へ入りました。二月二十三日、満支国境を通過し山海関へ、二月二十五日、山西省平定県陽泉に到着しました。下車して「寒い」と思わず口から出ました。

北支山西省の黄土のはげ山から吹き降ろす風は冷たい、私達の任務はこの地区を警備していました石部隊（田村大隊）が沖繩に移動、その交代要員として派遣されたと聞きました。後で田村大隊は沖繩戦で全員玉碎されたとのことでした。

ここで各中隊はそれぞれ任務の駐屯地に向けて出発しました。大隊本部は孟県城内へ、第一中隊は上社鎮区へ、第二中隊は娘子関地区、第三中隊は西煙鎮区、第四中隊は孟県地区、第五中隊は陽泉地区と、石部隊と交代して、その地区と鉄道の警備に従事することになりました。

第三中隊は陽泉より約四十キロ離れている孟県へ行くことになりました。山西省の黄土高原は、乾ききった中央アジアの広い砂漠地帯から吹きおろす黄土によって覆われており、幾重にも発達した階段状の台地で、またこの地区は特別解放地区で共産人路軍の巢窟にもなっているとのことでした。

寒風の中を夜行軍で孟県城に到着しました。ここで大隊本部と第四中隊とに分れ、ここよりさらに奥地の西煙鎮が第三中隊の駐屯地で、また歩かねばなりません。平坦地はまずまずの速度で進みましたが、山道になると隊列は乱れて長蛇の列になりました。

夕食の煙の上るころ、少し大きな部隊が見え、「あそこが西煙鎮だ、元気を出せ」と声を掛けながら歩き、黄土の山道を通ってやっと西煙鎮にたどり着きました。西煙鎮の警備陣地は、高さ五メートルぐらいの城壁の中に兵舎があり、城壁の外側は幅四メートルぐらい、深さ四メートルぐらいの

溝（クリーク）に囲まれていました。そして城壁には夜間動哨（警備勤務）する通路もあり、待ち受けていた石部隊の兵士たちの出迎えを受け、早速、防寒具類が支給されました。

石部隊の人達の話では、この地区は抗日意識の強い八路軍第一九団の根拠地で、岩山に穴を掘って潜伏し、ゲリラ専門の敵兵達です。百姓姿の農民が一変して兵隊になり日本兵を襲って来るので、気が緩められない毎日です。周囲は案外広い平坦地で、畑では麦、大豆、粟、馬鈴薯等が収穫され、食物は意外と豊富とのことでした。

この陣地でいくつかの分遣隊に分けられ、私達は二十キロほど離れた上王村分駐所に、分隊長以下十五人で勤務することになりました。石部隊との交代は三月十日までに完了し、石部隊は沖繩へと移動したとのこと。そして我々は酷寒の中で黄塵を浴びながらの出撃や討伐、警備に追われました。

昼間の襲撃は少なく、時折、夜襲があるので、

昼間は交代で武装したままのごろ寝で睡眠をとり、敵襲に対応する毎日でした。また分遣隊では生死は共に誓い、和やかな生活が何よりも慰めでした。

八路軍は山に穴を掘りモグラ生活で、時々没し日本軍を悩ませました。恐ろしいのは地雷源でした。至る所に埋められているので知らずに踏んで死亡した人や、負傷した人達もおり、用心しながらの出動の毎日です。地雷敷設は八路軍の得意な作戦のようで、河南作戦の時も地雷を踏んで負傷者ができました。

山西省に春が訪れるのは五月も半ばでした。柳の芽が出るころになりますと、八路軍の活動も活発になりますので目が離せません。食糧の確保も容易になりますので、方々で戦火を交えています。忘れ得ないのは十二月三十一日、上王村と東漢湖の分遣隊が中隊との中継連絡の帰途、八路軍の襲撃を受け、多数の戦死者が出ました。私の分遣隊員も九人が戦死し、分隊長と私達二人が残るといふ悲惨な激戦でした。戦争とはかくも悲惨なも

のかと実感しました。中隊の広場で遺体を茶毘に付する時、「捧げ銃！」の礼をしながら赤々と燃える火を眺め、必ず仇を討ってやるぞと血潮が湧く思いでした。相手を殺さねば自分が殺される、これが戦争だと、しみじみ感じました。

昭和二十年五月五日、山東省防衛のため独立警備歩兵第六大隊が編成され、私は第二中隊に編入になりました。そして大隊は省都済南の近郊「十六里河」に移駐しました。第四十三軍団の予備隊ではありましたが、九州男児で編成されている高橋中隊は、その中核として常に最前線に配置され重要な役割を果たして来ました。五月十五日より三十日まで、山東省諸城県付近の共産軍との戦闘にも出動し、戦果を上げました。

六月二十一日より七月一日まで勃海地区作戦にも出動し、共産軍に打撃を与えました。満南飛行場を警備している時、アメリカの空軍機の空襲を受け、アンペラで作った飛行機の型に機銃掃射と爆弾を投下して飛び去りました。敵機が去った後

アンペラの所に行きますと、爆弾の破片が飛び散り、拾って見ますと手も切れるような鋭い刃先で、これなら人間も即死だと思いました。幸い人間には被害はありませんでした。

時折、B 29 爆撃機が上空を飛んで行くのを見て、日本本土の爆撃にでも行くのかと眺めながら、日本本土のことが気になりました。

河南作戦でも度々共産軍の襲撃や地雷による負傷者も多く出ました。私も夜間、敵を追撃中、敵の掘った穴に落ち、機関銃を背負っておりましたので身動きが出来ず「あわや」という場面もありました。

八月十五日の終戦を知りましたのは、たまたま私は済南の街角で、日本の婦人達が話していましたので「終戦はほんとうですか」と尋ねますと「天皇陛下の玉音放送があったから間違いないですよ」といいます。私は「そんなことがあるものですか」と言い急いで中隊に帰りました。

中隊長は二、三人の将校と話しておられ、私が

日本のご婦人の話を報告しますと、隊長は「またデマだろう、そんなことはない」といい旅団本部に電話されました。その結果、終戦は事実と判明し騒然となりました。その日は弾薬庫の歩哨に立ちましたが大粒の雨で、体中びしょ濡れになったことを覚えています。終戦が事実と分かりましたので、青島方面で陣地構築しておりました中隊の仕事は中止されました。

終戦と共に山東省の共産軍の一斉攻撃が始まりました。北支と中支を結ぶ津浦線、膠濟線（満南と青島を結ぶ鉄道）が寸断されました。鉄道の破壊、電信線の切断、橋梁の爆破、レールの継目板の爆破、枕木や電柱の撤去焼却と悪質を極めました。

八月下旬、高橋隊は共産軍の攻撃に備え、完全武装で鉄道復旧工事を命ぜられました。問題は無条件降伏した日本軍が、共産軍と遭遇した場合、どの程度まで戦闘が許されるのかと、上官は心配したようでした。「降伏したのは蒋介石の国民政府

軍で、毛沢東の共産軍ではない」と割り切って任務に服しました。共産軍の襲撃に備えての毎日は、終戦の感激どころではありませんでした。

九月八日、膠濟線沿線「郭店」の東南方の高地での共産軍との戦闘で残念ながら脇山大隊長以下八人が戦死、負傷者十人という犠牲を出しました。高橋隊は連日鉄道の復旧作業に従事し、その日は作業列車の護衛を命ぜられ、待機していましたので助かりました。そして高橋大尉が大隊長職務代行に就任しました。

こうして出没する共産軍と交戦しながら鉄道警備を続けましたが共産軍は攻撃の手を休めません。十二月十六日より二十四日まで、曲阜県呉村付近の津浦線鉄道警備と在留邦人の引揚を妨害していた共産軍を大隊砲と迫撃砲の支援の下、大隊総力を挙げての払暁攻撃を実施しました。この交戦は高橋隊最後の戦闘になりましたがこれは終戦後の戦闘です。

十二月二十六日より一月十四日の間、泰安県大

汝口の炭鉱地区警備のため「呉村」を出発、「赤柴」着、炭鉱と赤柴線鉄道警備に当りました。そして一月中旬進駐して来た国府軍にこの地区の警備を委譲し、我々は泰安県東大平に集結しました。かくして終戦後の正月もゆつくりすることもなく、共産軍との睨み合いが続きました。

一月二十二日、ようやく内地帰還の喜びを胸に「東大平」を出発、その夜は津浦線沿線の「東北堡」に宿泊しました。そして翌二十三日、「泰安」向け進行中に共産軍が現れ、我々の前進が阻止されました。大隊長はじめ幹部が共産軍と交渉をしましたが、共産軍は武器類の引き渡しを要求し、話はずかなくなかった模様でした。その間に突如、重機関銃が発射され、大隊長や中隊長が並んでいた十人ぐらいの兵隊の中にいた吉田兵長に命中し吉田兵長が戦死、「あつ」という間のことで高橋中隊長最後の戦死者となりました。その時、アメリカ空軍P 38戦闘機が低空で飛来し、我々にビラを散布しました。ビラには「一月十日、国民政府と共産

軍の停戦協定が締結された」と書いてありました。国共合作となれば武器を簡単に使用することが出来なくなり「東北堡」に帰ることになったのですが、入口で共産軍に拒否され、厳寒の北支の鉄道の線路上で野宿をすることになりました。寒くて枕木で焚火を始めたところ共産軍の監視兵に見つかつて焚火を消され、寒い一夜を震えて過しました。

二日目の夜には畑の中のお墓（土饅頭）の側の木を燃やしておりますと、これもまた燃やしてはならないといわれ、二日目の夜も寒さに震えて過しました。「終戦になったのに」と皆なぼやきながら、三日目の夜は、典範令の紙等を燃やす者、中には夏物の襦袢や袴下までも燃やす者が出て、上官からは「そんなことはするな」と叱られました。野宿ですから北の夜風を防ぐ物はなく、吹きさらし中で寒さに震えるばかりで、終戦になってなんでもこんな苦しみをせねばならないのかと涙が出ました。

一月二十六日昼近くになって、やっと命令が出ました。それは次の武器を共産軍に引き渡す命令でした。大隊砲、迫撃砲、重機関銃、擲弾筒、軽機関銃、通信器材の全部、それに拳銃と眼鏡を引き渡すことでした。共産軍の要求は完全武装解除でしたが、ここまで止められたのは、七瀬大隊長の信任が厚かった高橋中隊長が単身、共産軍新四軍司令部に赴き、師団長や政治委員と談判した結果だと聞きました。そして引き渡す武器はきれいに手入れをして、日本軍の名譽を汚さないようにして引き渡しました。

武器の引き渡し完了すると共産軍から食糧の差し入れがありました。小麦粉、豚肉、生きた鶏、白菜、大根、人参などの野菜類と煙草などでした。共産軍は、我が軍の携行食糧の量まで知っていたのかと、上官たちは話していました。お陰で食糧は助かりました。

午後遅くなつて済南目指して急いで現地を離脱しましたが、やがて雨が降り出し「泰安」近くま

で来ると別の共産軍の検問にひっかかり、今度は小銃の引き渡しを要求してきました。そこで将校団が協議した結果、検問を通過するためにはと、小銃の半数を各中隊より集めて引き渡しますと簡単に通行を許されました。そこで泰安の市内を通らず不眠不休の強行軍で「張夏」に到着しました。これで共産軍の追跡もなくなつたと、ようやく大休止となりましたが苦難の五日目で、それは一月二十七日未明のことでした。

独立守備第六大隊は終戦後も、山東省一帯の日本人居留民と日本軍が内地に帰還する最後まで、引き揚げ及び復員の輸送便を確保するため済南と青島間の胛済線の警備と確保を命ぜられていました。最終引揚部隊の私達が青島に集結した時は、共産軍により鉄道のレールは至る所で寸断、撤去されていたということでした。

昭和二十一年二月十四日正午の国共合作の声明が発表されるまで、共産軍に徹底抗戦してきましたので、大隊長はじめ将校、下士官、兵と合計十

七人の尊い犠牲者が出ました。三月二十日ごろ、やっと青島まで撤収し、復員船「LBT」に乗船するまで青島駅構内の貨車の中で待機することになりました。

復員船に乗船する復員部隊は通例により駅ホームに横隊に整列し、各自その前に携帯品の背負袋やリュックサックを並べました。昨日までの復員部隊はリュックサックの中まで綿密に所持品検査がされ、中国で収集したと思われる品物などは全部没収されてしまいました。私達の部隊は検査されないまま乗船することが出来たので、おかしいと思いました。これは日ごろ、中隊長達が可愛がっていた中国のチョンピーという少年のお陰で国府軍の司令官が見逃してくれたと聞き、みんな大喜びでした。

昭和二十一年三月二十五日、青島港からLSTに乗船、出港しました。やっと日本に帰れる喜びの反面、北支山西省の黄土の山中で八路军と戦火を交えるなかで戦死された方々のことを思い、思

わず涙が頬を濡らしました。

船首が口を開けているLSTですから、東シナ海の大波にゆられ波しぶきが上ってきます。船の中でごろごろしながら、まだ見ぬ終戦後の日本に思いをはせ、なかなか夜も眠れませんでした。戦友達も故郷の話しばかりで賑やかでした。上官の話では我が大隊の戦死者は一三四柱で、第三中隊は三三柱であつたと知らされました。

三月三十日、佐世保港の針尾の復員船岸壁に到着しました。三年振りに日本の土を踏む嬉しさは、言葉ではいい尽せない感激でした。DDTを吹き付けられた私達はその夜は引き揚げ宿舎に宿泊しました。

翌日、「兵役解除」の命令を受け、二百円の一時金を受領し、お互い再会を誓いながら故郷に向け別れました。大村線から諫早駅で島原鉄道に乗り換え、島原湊駅で下車、急いで有馬船津の自宅に駆け込みました。私の元気な姿を見た両親、家族一同はびつくりして喜んでくれました。

先ず仏壇に報告し、幾度か死線からお守り下さったご先祖様に心からお礼を申し上げ、同時に戦争の悲劇を起してならないと誓いました。帰ってからの数日間は、北支山西省の思い出が、脳裏に走馬灯のように駆け巡り、よくぞ生きて帰れた、夢のようだと感謝しつつ共産軍の戦い、厳冬中の野宿、戦死した戦友のことなど種々の思い出が頭を掠めます。そして亡き戦友の分まで「祖国再建」にがんばるぞと、思わず叫びたくなることもありました。

左官の師匠も無事帰って来たことを喜んでくれました。早速師匠と共に、腕に仕込んだ左官の技術で終戦後の荒廃した建築物の修理に努力しました。

現在は長男が後を継いでいますが、戦後六十年間、平和な日本に感謝しながら悲惨な戦争の悲劇は一日も忘れたことはありません。平成三年五月に発刊された「黄土の征衣(大隊史)」を読む度に、過ぎし日を思い起しています。

野村義男氏の写真図に「博多山」「福岡山」「長崎山」と名付けられた山が描かれていますが、当時福岡県と長崎県の兵達がいかに活躍したかを物語っているようです。

山西の原野に散りし 兵(つわもの)の

勇姿しのびて 涙溢る

国の為 命捧げし 戦友の

武勲たたえ 誇り伝えん

一部「山西の黄衣」を参考にしました。